

慈雲

30号

2013/12

真宗大谷派 慈雲山 瑞蓮寺

慈雲会

〒604-8214

京都市中京区新町通蛸薬師下る

百足屋町375番地

TEL/FAX (075)221-4616

zuirenji@nifty.com

http://www.zuirenji.net/

SinsyuuOotaniha

JiunzanZuirenji

Jiunkai



却以説時不是
行身此二宜梅
而按語大住陀
退劍竟臣止羅

【『観経』の言葉】

これ梅陀羅なり。宜しく
此に住すべからず。一時に
二の大臣、この語を説き
竟りて、手をもつて劍を
按えて、却行して退く。

大臣の月光が阿闍世王に
諫言している続きです。母
である韋提希夫人を殺す
ようなことがあれば、それ
は当時のインドで身分制
度の最下層であった梅陀
羅であつて、ここ王宮に居
ることはできません。

月光と耆婆の二人は、そ
う言い終わると阿闍世王
の刀劍を手で押さえなが
ら、後ずさり退いたので
す。

この一連の行為によつ
て、怒りで目の前が見えな
くなつていた王は、ようや
く目が覚めて自分がして
いることの重大さを知る
ことになるのです。

今回は

至心信樂願為因

の一句を学びたいと思います。

至心信樂の願を因とす。

と読みます。

阿弥陀仏が修行中の法蔵菩薩だったときに、生きとし生けるものを救いたいと誓われて四十八の本願を建てられました。そのうち第十八番目に誓われた本願が至心信樂の願であります。

たとい我、仏を得んに、十方衆生、心を至し信樂して我が国に生まれんと欲うて、乃至十念せん。もし生まれずは、正覺を取らじ。唯五逆と正法を誹謗せんをば除く。

これが第十八願の文ですが、信心の願、いいかえればお浄土に生まれる為の因は〈信心ひとつ〉であるということです。私が信じる、ということに先立って阿

弥陀さまの方から「至心信樂」と誓われていることが私のところまで届いて私の上に現われたのであります。つまり単に私が起こす信心ではないのです。

十一月二十一日から二十八日までは毎年、本山東本願寺で「御正忌 報恩講」が勤まります。私は二十四日午後二時からのお逮夜法要にお参りをしてきました。厳肅なお勤めのあと、「御文法話」があり、引き続き「改悔批判」があり、そこで宗門校の女子高校生が話をしました。彼女の父親は今年の二月に亡くなったそうです。その後、彼女はずっと悔しい思いを引きずっていたそうです。父親に何の恩返しも出来ないままに亡くなってしまったからです。

その後、学校からお寺に行き、そこのご住職から法話を聞く機会があり、親鸞聖人の教えに触れました。お話の内容は、阿弥陀さまの本願は、私たちを救ってくださるために長い間考えぬかれて建てら

れたのだということ、そしてそのお光に私たちは照らされているということなりました。やがて彼女は「お父さんは私のことをずっと大事に思い、案じ育ててくれていたんだな。私がお父さんを思うよりもお父さんこそ私を念じてくれていた。思われていたのは私だった」と考えるようになったということでした。それから、彼女は父のことを思うとますます力が湧いてくる、と言っていました。このときの彼女の心の転換を今、信心といえます。心の向きが変わったのです。自力とか他力とかいいいますが、自力と他力があるのではなく、自力が転じたところが他力なのです。私の立場はどこまでも自力しかありません。徹底して自力を知らされる、それはいろいろな形でやってきます。この高校生の場合は父の死を通してでした。そして力が湧いてくるというのはご利益です。生活の中で「往生極樂の道」を歩むその一歩になったのです。

【帰敬式の感想】

先日の報恩講に引き続き三名の方が帰敬式を受式され、仏弟子とられました。感想分を書いて頂きましたので、ご紹介したいと思います。

釈 勝友

吉澤 慎

信心深いと思つた事もなく、まして知識も全くと言っていい程持っていなかった私に、生きて法名を授かる事が出来るとは。

そんな私が、ご縁があつて真宗の教えに触れ、お釈迦様の仏弟子にまでなるのは、思いもよらない事でした。

本当に私でつとまるのか？私で大丈夫なのだろうか？等々不安はありましたが、帰敬式の儀式が進むにつれて、全てが洗い流され無になつたように感じ、身も心も仏にあずけたような思いになりました。法名をいただき「勝友」と告げられた時は、素直にうれしく、ありがたく思いました。

まだまだ煩惱を切り捨てる事が出来ない私ですが、法名に込められた「釈勝友」

の意味を深く受けとめ、仏様の弟子としての生活していくご縁をありがたく感謝している次第です。法名を授かり、ありがとうございました。

釈 尼 淳心

吉澤 恵子

帰敬式を受式して

父が生前に「法名」を頂き、とても喜んで手紙の終わりに使っていたり、愛着を持っていました。

その様子を見て、私も生前に「法名」を頂きたいと思いました。

御住職より「法名」を手渡して頂き、「淳心」とあり、なぜか涙があふれ、ありがたくて、父もこの感動を受けたのかと思いました。

生前に「法名」を頂く事は、これからの自分の生き方にも参考になると思いました。

御住職に書いて頂いたように「聞法」を続け、仏さま・高僧方や先祖の心の深さを貫く「淳い心」を感じていきたいと思えます。

釈 尼 慈恩

堺 暉代

いつか瑞蓮寺さんから法名をたまわりたいと願つて参りました。そして、今年帰敬式を受けました。思いから数年過ぎていたのは、心からの願いが、頂点に達しきらなかつたからです。今年はどう待ち切れなくてお願いしました。どんな法名をいただけるのか、楽しみであり、不安もありました。本堂に於て、御門徒様が、同座して下さる前でお剃刀を受け心が引き締まりました。法名に添えられた言葉を讀んで、御住職の深い願いを感じる事が出来ました。今、法と俗、二ツの名を頂いて、深く自由な世界に出られた様です。「願われて生きるいのち」「佛の本願」と聴聞の中で聞く言葉の深い宇宙に放り出されたと感じて居ます。親鸞聖人の御書にある

「一人居て喜ばは二人と思ふべし」
「二人居て喜ばは三人と思ふべし」
「その一人は親鸞なり」

という言葉が私の中にしつかりと根着いた暮らしを過したいと願望しています。瑞蓮寺さんの報恩講から真直ぐに、叔母（叔父の仏前）に報告し、共に喜んでいただきました。不思議なことに、同じ新しい世界にでられると感慨深いものがあります。

【易行風】

帰敬式に出席させて頂き、自分自身が受式したときのことを思い出すと、今の自分が恥ずかしく思えてきます。

受式したときの真摯な気持ちを忘れていないか？自問すると、忘れているような気がします。

色々な勉強会や講座に参加させて頂き、当時に比べて知識（まだまだ赤子同然ですが）はついた気がします。返って智慧をおろそかにしていたのではないかと。

一期一会とは予期せぬ時に良き師に出会う事であり、人の一生に一回も廻ってくればその人は一生の幸である。

瑞蓮寺の前住職のお言葉で、慈雲の準備号に掲載しました。

当時、お寺・真宗の事は何一つ知らなかった私ですが、凄く良い言葉だなと思つた事を記憶しています。それから、月日が経ち多くの師に出会いました。その方達がこのお言葉と同様のお話をして下さいます。やはり、このお言葉は皆の思われるところなのだ。多くの良き師が私に色々なことをご教授くださる。私自身は幸なのだ。

しかし、このお言葉は、

人の一生に一回も廻ってくればその人は一生の幸である。

と言っておられる。

では、私が出会ったのは良き師ではないのか。そうではない、皆良き師である。このお言葉の意味がもっと深いのではないか。そう思えてなりません。

私の法名『釋風航』を付けて頂いたときに御住職から

仏さまの教えを聞くことで、人間は常に貪欲（むさぼり）・瞋恚（いかり）・愚痴（無明）の煩惱しか持たない存在であると気づかされます。それは、教えを聞くことで自分という船に帆をはり、そこで自然と大海原にのりだします。

とのお言葉を頂いています。

今は前住職のお言葉の深い意味を理解することは出来ませんが、自分が帰敬式を受式したときの真摯な気持ちを忘れず仏弟子として、仏さまの教えを聞き、知識では無く智慧を求め、自分という船に帆をはり、大海原にのりだし、師に出会って行くことの大切さを改めて認識した気がします。

釋風航

【編集後記】

師走となり、寒さも増してきましたが、皆様如何お過ごしでしょうか。

今回帰敬式を受式され新たに仏弟子となられた方、おめでとうございます。今後ともよろしくお願い致します。

皆様のおかげをもちまして、慈雲も三十号となりました。思い起こせば、当初はパソコンがさわられるからの理由で慈雲の編集をまかされましたが、右も左もわからず、御住職の書かれた原稿を、ただ並べて体裁を整えているだけでした。その私が真宗の教えを受けようと思つたのも仏のはからいのなせることなのでしよう。今年は推進員養成講座・瑞蓮寺同朋の会設立等あり、門徒間の繋がりが深まったと思います。来年はよりいっそう瑞蓮寺・慈雲会共に協力し、お寺と門徒の繋がりでではなく、門徒どうしの繋がりがりも深めていける年にしたいと考えています。

長塩浩史

瑞蓮寺のホームページができました。

<http://www.zuirenji.net/>